2021 年 1 月 27 日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　中村　康則
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　セルフ・ハンディキャッピングがオンライン大学で学ぶ社会人学生の学習継続に与える影響
論文題目（英文）　Effect of Self-handicapping on Continuation of Learning for Adult Students of Online University

公開審査会
実施年月日・時間　2020 年 12 月 10 日・16:00-17:00
実施場所　Zoom によるオンライン開催

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	向後 千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	西村 昭治	博士（人間科学）	大阪大学	教育工学
副査	早稲田大学・准教授	尾澤 重知	博士（知識科学）	北陸先端科学技術大学院大学	教育工学

論文審査委員会は、中村康則氏による博士学位論文「セルフ・ハンディキャッピングがオンライン大学で学ぶ社会人学生の学習継続に与える影響」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について 30 分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった（以下、セルフ・ハンディキャッピングを SHC と表記）。

1.1　質問：研究３における「時間不足 SHC 型」の類型は、成績も良く、学習時間が短いことから、学習効率の良い学生と解釈することもできる。そのように捉えれば、時間不足を見栄として表明している可能性も考えられる。この点はどう捉えれば良いか。

回答：見栄の表明は自己高揚的な SHC と捉えることができる。自己高揚的な SHC であっても、一度 SHC を採用すると、SHC を繰り返し採用するといった悪循環に陥る可能性があるため、「時間不足 SHC 型」の類型は、やはり不適切な類型と考え

られる。この点を加筆する。

1.2　質問：自己高揚的な SHC ということは、本当は時間不足でないにも関わらず、あえて時間不足を表明することで、自分の能力をより高く見せようとしているということか。

回答：そのように推察する。ただし、採取したデータからは、本当に時間不足であったか否かまでは明らかにすることができないため、この解釈には限界が伴う旨を追記する。

1.3　質問：研究２においては自尊感情を測定しているが、研究４では SHC にくわえ自己内省とハーディネスのみを測定しており、自尊感情や公的自意識を測定対象とはしていない。自己内省には自尊感情や公的自意識が関連すると考えられるが、これらを追加しなかった理由を説明して欲しい。

回答：研究４の「SHC 緩和モデル」は、自己内省を起点とする仮説モデルとしたため、自己内省に対し影響を与える可能性のある自尊感情や公的自意識を測定対象とはしなかった。この点を加筆する。

1.4　質問：今後の課題として、社会人学生が苦手とする自己内省をいかに促すかといったものがあるが、具体的にどのような手立てが考えられるのか。

回答：社会人学生はプライドが高い反面、プレッシャーに弱い特性をもつ。そのため、まずはその特性を理解すべきである。その上で、自己内省を促す際には、肯定的・建設的な問いかけを行うなどの手立てが考えられる。たとえば、「とても良く学習できていると思うが、さらに学習に打ち込むためには何をすれば良いか」「とても頑張っているが、何か一つ変化させるとしたら何に挑戦すれば良いか」などの問いかけである。

1.5　質問：実際にドロップアウトした社会人学生の SHC の特性を検討すると良いのではないか。また、研究対象を学生のみとするのではなく、教員や TA まで広げて欲しい。

回答：ドロップアウトした社会人学生を対象とした研究は、協力者を募るのが難しいと考えられるが、ご指摘のとおり対象とできれば有益と考える。また、社会人学生を担当する教員や TA を研究対象に含めるのも同様に有益である。そのため、これらを今後の展望に追記する。

1.6　質問：社会人学生の属性の幅は広いが、「SHC 緩和モデル」の多母集団同時分析では年齢差の検討にとどまっている。そのため、以後の研究では社会人学生の年齢以外の属性を考慮すべきである。

回答：ご指摘のとおり、社会人学生は伝統的な学生とくらべ属性の幅が広い。たとえば、既婚・未婚の違い、子どもの有無などである。本論文では協力者の数に限りがあったため、これら属性の幅の広さを十分に検討できていない。これは本論文の限界として「5.2 今後の展望」に記述している。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1　研究３において、「時間不足 SHC 型」の類型が自己高揚的な SHC 方略を用いている可能性について加筆する。

2.1.2　研究４において、自尊感情や公的自意識の概念を測定対象に含めなかった理由を補足する。

2.1.3　ドロップアウトした社会人学生、社会人学生を担当する教員・TA を対象とした研究の必要性について今後の展望に加筆する。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下のとおりの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1　「時間不足 SHC 型」の類型が自己高揚的な SHC 方略を用いている可能性について「3.2.4 考察」に加筆した。くわえて、この解釈には限界が伴う旨も「3.2.4 考察」に加筆した。

2.2.2　自尊感情や公的自意識の概念を測定対象に含めなかった理由について、「4.2 本章の仮説モデル」に加筆した。

2.2.3　ドロップアウトした社会人学生、教員・TA を対象とした研究の必要性について「5.2 今後の展望」に加筆した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、オンライン大学で学ぶ社会人学生の学習継続に資するため、学習継続上の阻害要因としてのセルフ・ハンディキャッピング（SHC）に着目し、それを緩和する手立てについて検討することを目的とした。リカレント教育の促進が叫ばれる中、日本で大学・大学院などの高等教育機関で学び直しを行っている社会人は減少傾向にあり、また、卒業率も高いとはいえない状況にある。このため、社会人の学び直しの支援は重要なテーマであると考えられ、本研究の目的はそれに合致する妥当なものと判断できる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、社会人学生の学習継続上のハンディキャップが SHC と関連し得ることを示した上で、社会人学生の SHC を測定するための心理尺度を開発している。また、それを用いて、社会人学生が SHC を統制不能的に使用することや、SHC が学習に悪影響を及ぼすことなどを示し、さらには、悪影響を及ぼす SHC を緩和するための手立てを検討するなど、各々の研究のつながりが妥当なものとなっている。データの分析方法については、先行研究等で適切とされる手法で解析されていることから、本論文の方法論も妥当なものと判断できる。

なお、本論文における研究３、研究４は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（承認番号：2017-293）」に基づき実施されており、倫理的な配慮が十分に為されていると評価できる。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、社会人学生が SHC を統制不能的に使用すること、SHC が学習継続に悪影響を及ぼすことを示した上で、SHC を緩和するためのモデルの検討が為されており、SHC の緩和に自己内省が有効である旨が明示されている。これらの知見は、本論文の目的と合致しており、SHC や成人学習の

先行研究と照らし合わせても、新たな示唆として妥当である。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1　本論文では、社会人学生の学習継続上のハンディキャップに着目し、それらのハンディキャップを抽出・分類した上で、それらが SHC と関連し得ることを見出している。これは従来にはない新たな視点であり、本研究の独創性として評価できる。

3.4.2　本論文では、社会人学生が SHC を統制不能的に使用することを見出している。くわえて、統制不能的に用いられる SHC を緩和するために、自己内省がハーディネスを媒介し、それが SHC を緩和するといった SHC 緩和モデルの検討が為され、SHC の緩和に自己内省が有効である旨が示されている。これらの点は、従来にはない新たな視点であり、本研究の新規性として評価できる。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1　本論文は、社会人学生の学習継続が SHC により阻害されるといった観点から、SHC を緩和するための新たな知見を提供しており、この点において学術的意義があると考えられる。

3.5.2　本論文は、社会人のリカレント教育に貢献できる具体的な知見を提供しており、この点において社会的意義があると考えられる。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：社会人に対するリカレント教育の促進は人間科学の重要なテーマの一つである。本論文では、社会人の学び直しを阻害する要因として SHC に着目し、かつ、それを緩和するための新たな知見を示しており、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

3.7　不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

中村康則（2018）．非伝統的学生の学業継続に影響する阻害要因についての文献的考察．日本生涯教育学会年報，(39)，213-229.

中村康則，向後千春（2019）．通信教育課程で学ぶ社会人学生のためのセルフ・ハンディキャッピング尺度（SHS-ASCC）の開発．日本教育工学会論文誌，42(4)，355-367.

中村康則，向後千春（2020）．セルフ・ハンディキャッピングとハーディネスを用いた社会人学生の類型化と成績・学習時間との関係．日本教育工学会論文誌，44(Suppl.)．（早期公開）https://doi.org/10.15077/jjet.S44042

中村康則，向後千春（印刷中）．通信教育課程で学ぶ社会人学生のセルフ・ハンディキャッピング緩和モデルの検討．人間科学研究，33(2).

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上